

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 北京ヴァイオリン

2002年・中国映画・117分  
配給/シネカノン

2003 (平成15) 年7月6日鑑賞  
2004 (平成16) 年7月1日鑑賞  
〈シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004〉

Data

監督：陳凱歌 (チェン・カイコー)  
出演：唐韻 (タン・ユン) / 劉佩奇  
(リウ・ペイチー) / 陳紅 (チ  
ェン・ホン) / 王志文 (ワン・  
チーウェン) / 陳凱歌 (チェ  
ン・カイコー)

### 👁️👁️ みどころ

いわゆる中国の「第5世代」監督の旗手である陳凱歌 (チェン・カイコー) 監督も今や50歳。『さらば、わが愛／霸王別姫』、『始皇帝暗殺』、『キリング・ミー・ソフトリー』に続く最新作は、ふるさと中国でのヴァイオリンの天才少年を主人公としたもの。父子のストーリー、師弟のストーリー、そしてまたいかにも近代中国らしく(?)、パパに貢がせるきれいでリッチなお姉さんも絡ませたよくてきた感動作。チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲 (チャイ・コン) がメインだが、それ以外の音楽も最高。国際コンクールへの出場権を棄て、北京駅で涙の熱演をする主人公。出生の秘密を背景とした、この最後の北京駅のシーンでは、涙がどっと溢れてくること間違いなし。もう最高のおすすめ映画です。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### 〈19世紀末の中国と西欧列強そして日本〉

新生中国すなわち中華人民共和国の建国は1949年。19世紀末の中国は清帝国だったが、イギリス、オランダ、ドイツ、アメリカ等の西欧列強、帝国主義の侵略を受け、長い間苦しんできた。そこに割り込んできたのが新興国日本だ。1868年、明治国家を成立させた日本 (大日本帝国) は、1894～95年の日清戦争、1904～05年の日露戦争を経て、アジアで唯一の近代資本主義国家として、「西欧列強に追いつけ、追い越せ」の勢いを示し、急速に軍事力と国際的発言力を強めていった。そして1914～18年の第一次世界大戦において、日本は日英同盟を軸としてヨーロッパにまで応援を送ってドイツをたたき、本気でアジアにおける盟主を夢みるようになった。

## ＜五族協和、大東亜共栄圏を夢みた日本＞

白人社会による支配を排し、同じ黄色人種である日本が中国をはじめとするアジア諸国の盟主となる・・・あの時代のこの考え方自体が大きく間違っていたとは私は思わない。しかしこの考え方は、五族協和、大東亜共栄圏というスローガンの下、軍事的、政治的に利用されることになった。その上、日本国そのものが、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』で描かれたような明治時代の前向きの姿勢をもった国家、そしてまた大正デモクラシーと呼ばれた民主主義の国家から、いつのまにか軍部と軍事官僚が支配する軍事大国ニッポンに変質、変容していった。

昭和初期の果てしなき「軍備拡大競争」にも日本国民は必死で「協力」したが、それらは次第に政治に優先する力をつけていった軍部と軍事官僚の独断と暴走を許す結果となった。そして五族協和、大東亜共栄圏の美名の下に、1931年9月18日の満州事変を勃発させ、さらに1932年の満州国の建国、1933年の国際連盟の脱退、そして1937年の盧溝橋事件の発生により、本格的な日中戦争が開始し、次第に泥沼化していった。そして1941年12月8日のパールハーバー攻撃による日米開戦。その挙句に1945年8月15日の日本敗戦に至るのである。

## ＜日本敗戦そして新生中国の誕生＞

日本が敗戦を迎えた1945年、中国は戦勝国だったが、この時はまだ不安定。それまで対日統一戦線の旗印のもとに、一致協力して日本の侵略軍と闘ってきた蒋介石率いる国民党と毛沢東率いる中国共産党は、日中戦争に勝利した後は、「国共内乱」の時代に突入した。結果的には中国共産党が勝利し、蒋介石は台湾に「逃走」した。そしてついに、1949年10月1日、天安門広場において、中華人民共和国の建国が宣言されたのだ。

## ＜新生中国の第5世代監督たち＞

陳凱歌監督は1952年生まれ。これは新生中国誕生の3年後だ。猛威をふるったSARS騒動は、つい先日(2003年7月初旬)、WHO(世界保健機構)によって北京でも終えん宣言が出されたが、今中国の政治的指導者は胡錦濤。「革命第4世代」だ。中国の「革命第1世代」は毛沢東、「革命第2世代」は鄧小平、「革命第3世代」は江沢民、そして「革命第4世代」が胡錦濤と続いている。これに対して陳凱歌監督はいわゆる第5世代監督といわれているグループの代表格の一人だ。中国第5世代の監督とは、陳凱歌(チェン・カイコー)、張芸謀(チャン・イーモウ)、田壯壯(ティエン・チュアンチュアン)らを指す。1966年5月から1977年まで続いた毛沢東の指導による「文化大革命」の中、数年間の「下放」生活(後に説明)を体験した陳凱歌らは、文革後の1978年に再開された北京電影学院に第1期生として入学した。そして1982年にこれを卒業した彼ら第1期

生は、各地の映画製作所に赴き、次々と作品をつくり発表した。陳凱歌監督がデビュー作として1984年に発表した『黄色い大地』は、第38回ロカルノ国際映画祭銀豹賞、第7回ナント三大陸映画祭最優秀撮影賞を受賞し、その名は一躍世界的に注目された。さらに『紅いコーリャン』（1987年）で第38回ベルリン国際映画祭グランプリを受賞した張芸謀監督も有名だ。

### <陳凱歌監督の作品あれこれ>

陳凱歌監督は、1984年の『黄色い大地』以降、『大閩兵』（1985年）、『子供たちの王様』（1987年）、『人生は琴の弦のように』（1991年）、『さらば、わが愛／霸王別姫』（1993年）、『花の影』（1996年）、『始皇帝暗殺』（1998年）、『キリング・ミー・ソフトリー』（2001年）、『北京ヴァイオリン』（2002年）を製作している。

私にとっては、『さらば、わが愛／霸王別姫』と『始皇帝暗殺』は永久に胸に残る作品であり、ビデオで何回観ても飽きることのない感動的な歴史ドラマだ。唯一の異色作品は『キリング・ミー・ソフトリー』。美人女優ヘザー・グラハムが主演したこの作品は何ともエッチな作品で、中国人監督の作品とは思えない味のハリウッド映画だった（『SHOW-HEY シネマルームI』78ページ参照）。

### <陳凱歌監督の一つの到達点>

その陳凱歌監督も今や50歳をこえ、その姿を見るとデブプリと太り、いかにも中年オジサンそのもの。しかし陳凱歌は、自身も俳優として、ベルナルド・ベルトルッチの『ラスト・エンペラー』（1987年）では近衛隊長の役で、『始皇帝暗殺』では始皇帝の実の父とされる呂不韋の役を演じる等、役者としても活躍している。

この北京ヴァイオリンでは、陳凱歌自身がユイ教授として出演し、かなりウエイトの大きい役割を演じている。またこの映画で登場する唯一の女性であるリリを演じている陳紅（チェン・ホン）は、陳凱歌夫人だ。このように、『さらば、わが愛／霸王別姫』、『始皇帝暗殺』等の超歴史大作をつくり、『キリング・ミー・ソフトリー』でハリウッド進出を果たした陳凱歌監督が、50歳という節目を迎えて、もう一度ふるさと中国の良さを見直し、ヴァイオリンの天才少年をテーマとして、人間の心や感動を描きたくなったのではないかと。そのような陳凱歌監督の思いがこの作品から十分伝わってくる。私はこの作品をこのような陳凱歌監督の一つの到達点として理解したいと思う。

### <文化大革命と「下放」政策>

中国映画に名作は数多くあるが、クラシック音楽を扱ったものは当然少ない。なぜなら植民地時代の中国には、クラシック音楽を勉強できる子供など誰一人いなかったし、新生中国になってからも貧しさとの戦いや政治抗争が続き、とてもクラシック音楽の学習にま

で手が回らなかったからだ。それに輪をかけたのが1966～77年の文化大革命。「造反有理」をスローガンとした文化大革命は、いわば昔の秦の時代の「焚書抗儒」をバージョンアップしたようなものであった。すなわち、すべての古い価値観を否定し、毛沢東思想を絶対化・神格化するとともに、「労働者・農民から学べ！その生活を体験せよ！」との考え方の下に知識人は迫害され、その「ブルジョア的思想」を一掃するため都会から田舎へ送られ、革命思想を学ぶための労働体験を強要された。これが「下放」政策であり、陳凱歌もその体験者だ。

### <『小さな中国のお針子』も小道具はヴァイオリン>

もともと映画監督であり、自ら10代の青春期に下放された経験をもつフランス在住の中国人作家、戴思杰（ダイ・シージェ）が、自らの下放体験をテーマとしてつくったのが、最近公開された『小さな中国のお針子』（2003年）だ。これはフランス映画だが、舞台は中国。文化大革命真っただ中の1971年に山奥へ下放された医者の子息である17歳のマーと18歳のルオ、そしてそこにいる美しいお針子の娘との恋を描いた、いかにもオシャレなすばらしい作品だ。

この映画の中でマー君が弾くのがヴァイオリン。共産党に対しては忠実だが、西洋の文学や音楽に関しては全く無知な村長による、入村に際しての手荷物チェックによって、危うく廃棄されそうになったヴァイオリンは、とっさの機転で弾いたヴァイオリンソナタの美しい音色によって何とか守られた。もっとも、マー君が弾いたそのモーツアルトのソナタの曲名は、何と「毛主席を想って」だったからよかったのかもしれないが……。こんなごまかしがきくほど、当時の中国はクラシック音楽には無知な状況だったわけだ。『小さな中国のお針子』のテーマは、もう一つ西洋文学。中でもバルザックの小説『モンテクリスト伯』だ。

### <陳凱歌監督とクラシック音楽>

1982年に北京電影学院を卒業した中国第5世代の監督達は、今大体50歳になっている。彼らは良くも悪くも青春時代を知識階級、エリート階級として過ごしてきたから、その時代においてもわずかに存在したクラシックレコードを聴いたり、外国の文学全集を読んだりすることができたわけだ。パンフレットによると、陳凱歌監督も「かねてから西洋のクラシック音楽のファンで、文化大革命の中もわずかなレコードを何とかして聴く機会を見つけ、涙を流すほど感動したものだ。」と書かれてある。

### <田舎まちから北京へ出発！>

この映画は、13歳のヴァイオリンの天才少年チュン（唐韻）（タン・ユン）を主人公にした作品。チュンは中国南部の豊かな水を讀えた美しい田舎まちで有名なヴァイオリンの

天才少年。しかし、中国全土で認められるためには何としても北京に出て行く必要がある。そのため父親のリウは長い間頑張ってお金を貯めてきた。そして今日は北京へ出発する日だ。

最初の画面に出てくるのは川の流れる中国の古いまち。こんなまちになぜ13歳の天才ヴァイオリニストが育っているのか実に不思議だが、そんな無用な詮索はやめておこう。

川辺で散髪をしてもらっていた人気者のチュンは大声で呼ばれた。陣痛で苦しんでいるところに呼ばれてのヴァイオリン演奏の注文だ。チュンの美しいヴァイオリンの音色のおかげで無事出産を終えた雇い主は、チュンにお礼のお金を渡す。そんなお祝いの席にさらに朗報。配達された手紙にはチュンが北京のコンクールに出場することが決定した、と書かれていた。このオープニングのシーンは、素朴な田舎まちで仲良く過ごす中国の人達の姿をよく描いており、微笑ましい限りだ。

### <感動的な父子愛>

北京でのコンクール。その会場である「北京市少年宮」で父親のリウ（劉佩奇）（リウ・ペイチー）は、隣の観客に自慢気に「あれは私の息子です！」と話していた。そしてチュンは見事5位入賞だ。北京の音楽学校にチュンを入学させたいリウは審査員に頼み込むが、北京の住民票がなければ土台無理。どうにもならない。ただし、誰か先生が引き受けてくれたら話は別だが・・・。

そこからリウの活躍が始まった。チュンに対してヴァイオリンの先生をつけてやりたいとの一念にもとづくリウの行動力には、ただただ感服。田舎まちから、何のツテもなく大都会の北京に出てきたうえ、一流のヴァイオリン教授の弟子になるなんてことは、今の日本の音楽界のシステムでは絶対に不可能なこと。それはきっと中国でも同じだろう。しかしチュンの父親リウは、持ち前の善良さと人一倍の努力、そして周りの人達の善意と好運に恵まれて、夢が少しずつ叶っていった・・・。もともと、さすが陳凱歌監督のつくった映画。話はそれほど単純ではなく、この後、父と息子との葛藤を含めたいろいろなドラマが複合的に展開されていく。

### <金持ちの男に貢がせる女リリ>

1980年代の中国映画では考えられなかった、美しくリッチ、しかし退廃的で男をだましたり貢がせたりすることを何とも思わない女。またべらぼうに気が強いが本当は心やさしい女。そんな難しい役どころの女リリを演じているのが、陳凱歌監督夫人の陳紅（チェン・ホン）だ。チュンと北京駅で偶然に出会った彼女は、最初から最後までチュンのそばでチュンを支えることになる。そして時にはチュンの憧れの女性となったり、やさしいお姉さんになったりするが、父と息子の気持ちの葛藤がリリにも波及し、さまざまなトラ

ブルにも巻き込まれることに・・・。

リリの必需品は携帯電話。リリはいつも携帯電話を操って金持ちの「パパ」をだまして貢がせては洋服を買い、派手な服を着て出歩いている。だから、ある意味ではアメリカ文化に毒された「人民の敵」ともいえるイヤな女だが、何の何の、そんなことはない！リリは実にいい女。中国女性でこんな魅力的なキャラの役割はきっと初めてだろう。

ちなみに、はじめてリリのアパートを訪れたチュンが、リリのリクエストに応じてヴァイオリン演奏するのは、テレサ・テンの『月亮代表我的心』。この曲は日本ではほとんど知られていないが、最近私が中国語の歌詞を覚えて、カラオケでもよく歌う、テレサ・テンの名曲中の名曲だ。男女の愛をテーマとしたこの曲を、切々とヴァイオリンでうたいあげるとチュンの演奏は初めて聴いたが、すごく感動。ちなみにこの曲の歌詞は次のとおり。

### 月亮代表我的心

テレサ・テン

[イル] 問 我 愛 [イル] 有 多 深

にい・うえん・うお・あい・にい・よう・とうお・しえん 我 愛 [イル] 有 幾 分  
うお・あい・にい・よう・ちい・ふえん

我 的 情 也 真

うお・てい・ちん・いえ・ちえん 我 的 愛 也 真

うお・てい・あい・いえ・ちえん

月 亮 代 表 我 的 心

ゆえ・りいあん・たい・ぴあお・うお・てい・しん

[イル] 問 我 愛 [イル] 有 多 深

にい・うえん・うお・あい・にい・よう・とお・しえん 我 愛 [イル] 有 幾 分  
うお・あい・にい・よう・ちい・ふえん

我 的 情 不 移

うお・てい・ちん・ふう・い 我 的 愛 不 變

うお・てい・あい・ふう・ぴいえん

月 亮 代 表 我 的 心

ゆえ・りいあん・たい・ぴいあお・うお・てい・しん

※ 輕 輕 的 一 個 吻

ちん・ちん・てい・い・こお・うえん 已 經 打 動 我 的 心

い・ちん・だあ・とうおん・うお・てい・しん

深 深 的 一 段 情

しえん・しえん・てい・い・とうあん・ちん 教 我 思 念 到 如 今

ちあお・うお・す・にいえん・たお・るう・ちん

[イル] 問 我 愛 [イル] 有 多 深

にい・うえん・うお・あい・にい・よう・とうお・しえん 我 愛 [イル] 有 幾 分  
うお・あい・にい・よう・ちい・ふえん

※※ [イル] 去 想 一 想

にい・ちゆ・しいあん・い・しいあん [イル] 去 看 一 看

にい・ちゆ・かん・い・かん

月 亮 代 表 我 的 心

ゆえ・りいあん・たい・ぴあお・うお・てい・しん

<※ 繰 り 返 し、※※ 2 回 繰 り 返 し

### <中国の改革開放政策そして人治主義から法治主義へ>

今中国は、「人治主義」から「法治主義」に大きくそのかじりを変えようとしており、革命第4世代の胡錦濤をリーダーとしてその第一歩を踏み出そうとしている。中国では1978年12月鄧小平副主席が実権を握り、経済の改革開放政策を開始した。そして以降、

- ①経済特別区の設置（深せん、厦門など4か所）（1980年）
- ②農村の集団生産組織である人民公社を解体し、農業改革を促進（1982年）
- ③国有企業の利潤の上納制を納税制に転換（1984年）
- ④沿海部主要都市を外資に開放し、経済技術開発区の建設を決定（大連、青島、上海など14都市）（1985年）

等の政策が矢継ぎ早にとられた。1989年6月に天安門事件が勃発し、民主化の動きは一時大きく「挫折」したものの、改革開放政策そのものには変更はなく、1992年1月の鄧小平による「南巡講話」において、経済の改革開放及び経済成長のより一層の加速が指示された。このような改革開放政策の中、中国は20数年の間に驚異的な経済成長を成し遂げた。

しかし他方、このような動きの中で、中国共産党の一方支配と官僚支配の中で汚職と腐敗がはびこっており、その改革は容易なことではない。

### <コンクールの審査基準あれこれ>

こんな北京でのヴァイオリンのコンサートは、一体誰がどんな基準で審査するのだろうか？そもそも、このような芸術分野の審査基準は微妙なもの。日本で一時流行っていたナインティナインが司会するオーディション番組『ASAYAN』は、今や人気絶頂の「モーニング娘。」を生んだ。この番組のプロデューサーはかつては小室哲哉だったが、その後

は「つく」。このようにプロデューサーがはっきり決まっている場合は、さまざまな審査基準があっても最終的には「つく」の「鶴の一声」で合否が決まる。また審査過程がある程度公開され、透明性があるからテレビの視聴者はその審査に納得できる。これは今、「安室ちゃん」の元ダンナの「SAM」がやっているダンスのオーディション番組でも同じだ。しかし北京でのコンクールの合否の基準は……。これは実は、音楽の実力ではなく、お金と人脈だ。

「コンクールの優勝者はコンクールの後援者の関係者に決まっている。これは仕方ない。どうせ出場者はみんな似たようなレベルなんだから……。」トイレに隠れていたリウはこんな会話を聞いた。そしてこの時、審査員の一人のチアン先生（王志文）（ワン・チウウェン）は、「一人いいのがいたな」とも。さらに「5位の子か？」との答えに対し、「入選させたか。まだ良心はあるな……」。この会話を盗み聞きしたリウは有頂天。早速チアン先生のもとにチュンの弟子入りを頼んだが……。

## ＜2人の教師一心のチアン先生と成功者のユイ教授＞

チュンの最初の個人教授はチアン先生。いつも同じ服を着ている独身の変わり者で、部屋は汚く、拾ってきた猫の匂いでいっぱい。金で順位が決まるような音楽界に失望して、投げやりになっており、今や隠遁生活に近い状態。このチアン先生とチュンとのレッスンの有り様と心の交流の場面はたくさんあるが、実にすばらしい。

しかしチュンの北京滞在のために北京で仕事についてリウは、ピザを配達にいったコンサート会場で、時の若手ヴァイオリニスト、タン・ロン（李伝韻）（リー・チュアンユン）の演奏を聴いた。演奏終了後、タン・ロンは恩師のユイ教授（陳凱歌）（チェン・カイコー）を舞台に迎え、2人で抱き合った。感激の一瞬だ。

その直後、前と同じくトイレに隠れていたリウは、ユイ教授がタン・ロンに「金のための演奏ばかりするな。客が拍手をするのは何のためだ。お前が有名だからで音楽にじゃない。現状に甘んじるな。今後も成長し続けるためにはどうすればいいか。」と諭すのを聞いた。

そこでリウはチュンの教師の変更を画策だ……。これは見方によっては実にイヤらしい。なぜなら、せっかくの好意でチアン先生にチュンの講師を引き受けてもらったのに、新しく実力者ユイ教授を見つけたので、それに乗り換えようというのだから。「恩知らず！」と批判されても仕方がない行為だ。もっともリウのやり方は実にうまい。ここらが中国何千年の歴史の中で育まれてきた交渉術か……と弁護士の私も思わず納得。

リウはずうずうしくもユイ教授の自宅まで押しかけた。ユイ教授の自宅は高層ビルが林立する北京の近代的なまちの中のマンション。これが中国の「成功者」の住む超豪華高級

マンションか、ということがよく分かり、興味深い。

### ＜ユイ教授の狙いは・・・＞

ユイ教授は権威主義者であり、「成功者」。しかしユイ教授も「私もかつてはヴィヴァルディの「四季」を愛した時代があった」と学生達に語る。そして、「技術は教えられても、感情はキミのものだ」とチュンに対して指導する姿は、「弾くな！音楽を感じる！」と指導するチアン先生と全く同じ、音楽を愛する人間そのものだ。もっともユイ教授の狙いは、人材育成だけではない。ユイ教授は、自分の内弟子として目をかけていた少女リンとチュンを競わせて、国際コンクールでの入賞を目指しているが、これにはもちろん自分の名誉もかかっているわけだ。

このように対照的な2人の教師に恵まれながら、チュンは、今は、ユイ教授の要請によりリウと別れ、ユイ教授の自宅で内弟子として国際コンクールに向け、練習の日々を送っていた。

### ＜出生の秘密は・・・？＞

リウは強引にチュンの弟子入りをユイ教授に頼み込んだ。そしてリウの話に教授の奥さんは涙を流して感動した。またチュンのヴァイオリンの音色を聴いたユイ教授は、一瞬にしてチュンの才能を見抜いてしまった。チュンは、2歳の時に母親と死に別れた・・・。チュンは父親リウからそう聞かされ、そう信じ込んでいた。しかし、なぜ中国の田舎まちの料理人のリウから、こんな天才ヴァイオリニストが生まれたのか・・・？

国際コンクールへの出場をめぐって、同じ内弟子のリンと共に練習に励むチュン。リウはこんなチュンの将来のため、自分が近くにいることはマイナスだと判断し、しばらく田舎に帰ることを提案する。それを了解しつつ気持ちが落ち込んでいくチュン。そしてチュンはコンクール出場の意欲が薄れてきたとユイ教授に告白した。そんなチュンを励まし、勇気づけるためにユイ教授から出た言葉は・・・。それは13歳の少年にはあまりにも思いがけないショッキングな内容だ・・・。

### ＜チャイ・コンで勝負＞

国際コンクールでチュンが弾く曲は、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲（チャイ・コン＝チャイコフスキーのヴァイオリンコンツェルト）。これはメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲と並んで、あまりにも有名な曲だ。ちなみに4大ヴァイオリン協奏曲には、この2曲の他に、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲とブラームスのヴァイオリン協奏曲の2曲が入るが、これらのカップリングのLPレコードは、私も何枚も集めてよく聴き比べたものだ。

## <コンクール出場よりも大切なこと・・・>

コンクールのリハーサルでチュンは完璧な演奏を披露した。そして本番の朝、ユイ教授はコンクール出場者は、リンではなくチュンだと指名した。しかしそのチュンに対してリンは、ユイ教授のある秘密を打ち明けた。そして今、チュンの目の前には、チュンが父親との確執の中で、売り払ってしまった大切な母親の形見のヴァイオリンがあった。果たしてこれは・・・。

チュンはこのヴァイオリンを手取るやいなや、田舎に帰ろうとする父親がいる北京駅へ走った。すると、コンクールでチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を弾くのは誰・・・？しかし、今やチュンはそんなことはどうでもいいことだった。チュンにとって、もっと大切なもの、それは・・・。涙がどっと溢れてとまらない、何とも言えないシーンだ。

## <始まりは北京駅、そしてラストも北京駅>

この映画は本当に良くできている。田舎まちでのオープニングの出来事の後に描かれるのは、北京駅。コンクールに出場するため、はるばるやってきた近代的な大都会の駅だ。北京駅の雑踏の中をかき分けて歩く2人。ここで伏線として描かれるのが、リリとの出会い。中国にとって、この北京駅は豊かさや成功の象徴であり、まさに新生中国の象徴そのものだ。

そしてラストもこの北京駅。田舎へ帰るリウを見送るために同行していたのは、今やすっかりリウのお友達となったりリリとお世話になったチアン先生の2人だ。そしてこれを追いかけるチュン。チュンは目に涙をいっぱい浮かべながら、北京駅でチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を弾いた。その演奏は、国際コンクールでリンが弾いているはずの演奏をはるかに上回る、感動的な、「心で弾く」音楽だった。まさに涙、涙、涙のエンディング・・・。

中国映画バンザイ・・・。陳凱歌監督バンザイ・・・と思わず心の中で叫んでしまった。

## <総評>

この映画に出てくる人物には悪いヤツは一人もない。人間それぞれに欲望があり、変わったヤツもいるが、みんな素朴で善意の人ばかりだ。黙々と郵便配達をする父子の姿を描いた『山の郵便配達』（2001年）にも感動させられたが、その感動の源は、人間の善意や誠意、そしてひたむきさにある。今の日本ではほとんど失われてしまったこれらの素朴さや善意が、これらの中国映画にはテンコ盛りだ。もちろん映画製作のテクニックは必要だが、感動の源は人間の善意や希望、努力そして愛情であり、それを率直に表現すれば

自然に感動作が生まれてくるわけだ。

私はそういう映画が大好き。ホラー映画や妙にひねった映画はいらない。人間が一生懸命に生きていく姿を描く感動作がいい。この『北京ヴァイオリン』という映画の作り方は最高。音楽のすばらしさは言うまでもない。この北京ヴァイオリンのサウンドトラックは今や私の愛用のMDの一枚となっている。間違いなく、私の年間ベストテンの上位に入る作品だ。

2003（平成15）年7月7日記